

---

# 奴は小石

山吹弓美

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

奴は小石

### 【著者名】

山吹弓美

N7399W

### 【あらすじ】

拾った小石は、じつや石像のかけらだった。おまけに意思を持つて動くらしい。

私はじつと、テーブルの上を見つめていた。

そこにいたせりや、何も考えずに拾つてきた小石が1個載つていて。

「せりやから何じつと見てんだよ！ オレが何かおかしいのかー！？」

「その小石が自分の身体をかたこととゆすりながら、せりやー、せりやーとわめき立てているんだある。

いやまあ、最初はものすじく驚いたよ。誰も触つてないのに石がいきなり動いて、おまけにどこから発声してるんだか知らないけれどとにかくわめいてんだから。もつとも私はきやーとか叫ぶ前に硬直してしまったから、外から見れば石ころを……つまり、石自身から見れば自分を凝視しているように見えたんだろうな。

なんだけど、しばらくほかーんとそいつを見てたら、何だかそういうふうとはどうでも良くなつた。

……あ、いやちょっと語弊があるか。どうでも良くはないのかも知れないけど、どうやらこいつは私より弱いと分かったから。だって、私より何らかの形で強いならその強さを行使してきそうなもんだし。だのにこいつはテーブル上でかたかた天板を叩きながら叫ぶだけ。

おかげで頭があつさり冷えた。相手は自力で動いてしゃべるけれど、しょせんはそれしかできないただの石ころである。何も怖くはない。いやなら放り投げるなり蹴り飛ばすなりして、視界から消し去ればいいのだ。どうせなら物置から金槌でも持つてきて、叩き壊してしまつてもかまわない。

まあ、それをしないのは私の気分。例え石とはいへ動いて声上げてんだから、ある意味生き物なのだ。拾つてきてしまつた生き物を

また捨てたりあまつさえ碎いたりつてのは、さすがに気分が悪い。  
かといって石じゃあ保健所も引き取ってくれないだろうから、捨てるなら……元あつた場所？ 確か廃校になつた近くの小学校だつたつけな。

「そりやおかしいでしょ。何でただの小石が声上げてがたがた動いてんのよ」

そんなことをひとしきり考えてため息をついた後、私は人が考え事してゐる間延々騒いでいた小石を指先でぴんと弾いてやつた。軽くはねてかこんと音がした途端「あいてつ」という悲鳴が上がるあたり、この石ころには痛覚があるようだ。まあ私が見ることが分かつてゐるんだから視覚の類もあるんだろうし、その他の五感があつてもおかしくないんだろうなあ。とりあえず、可愛い少年っぽいその声はどこから出てるんだ。

テーブルの上に戻してやつた後、私は石ころから……えーと、どうやら男らしいので彼、から事情を説明された。何でもこいつは、大概の学校において校庭の片隅に置いてある石像のかけら、だそうだ。長年置かれてて沢山の子どもたちを間近に見て來たせいか、いつの間にか意思が宿つていたのだという。ああ、確かこういう類の妖怪だか何だかの呼び方があつたつけな。クラスメートにこういうのが好きな子がいて、何か言つてた。

「付喪神……だつけ。しつかし、石像のかけらの付喪神ねえ」

「いーじゃんか、長いこと学校にいたんだし」

つても、つてたしか数字の99と引っ掛けたような気がする。そのくらい年数が経つほど人のそばに存在していれば、無機物にも靈が宿るとかそういうことなんだろう。古い家には何か憑いてるつて言つし。

こいつがいた学校は、廃校になつたのが創立110年めとか何とか言つてたように思つ。だいぶ古びた石だから、創立された初期からこいつの元になつた石像は学校の隅っこに立つていていたんだろうな

あ。

そうして長い間子どもたちの成長をずっと見つめてこられた、元ひめの

意思が生まれた。

私は別に幽霊とか信じてるわけじゃないけれど初詣には行くし、人間じゃない何かがいてもおかしくはないだろう程度の認識は持っている。さつきちらつと出たクラスメートとの会話も、特に相手の趣味を否定するつもりもなく普通にできている。だから、驚きはしたものこの石ころの言うことを……いや、石ころが何かを言うこと自体疑つつもりもない。疑う以前に目の前で起きてしまつてゐるしね。

だけど、学校でよくある怪談といったら例の石像が夜中に校庭を走り回つたりするパターンのはず。つまり、石像がそのまま意思を持つことはあってもこつ、かけらになつてまでつてのは聞いたことがない。というか、かけらになつてゐることはないつまり石像が壊されているつてことだ。

「しつかし、かけらになるなんてアンタ何かされたの？」

「お、おう。ほら、廃校になつちましたから人があまり寄り付かないだろ、それをいいことに悪ガキが夜中に忍び込んだりするんだよ。そいつらが面白半分に金槌でごーんとぶつ壊しやがつて、もー痛かつたの何のつて」

「あらら、『愁傷さま』

オーケー、碎けた理由は分かつた。廃墟がガラス破れてたり内装がぐつちゃぐちゃになつてゐる要因のひとつはそういう悪ガキどもだから、納得もできる。

しかし、痛かつたの一言で済ませてるけどこいつ、自分の身体がばらばらにされたつてことなんだよな。痛覚あるんだし、いう言葉にできないくらいものすごい痛かっただろう。

あ、何だか私、こいつに同情してゐる。  
いや、したつていいよね？

さて。

一応この小石は生きてるモノなわけで、そうすると最大の問題はあれだろ？。

「あんた、『』飯とか後寝るのはどうじてんのさ？」

そう、生物ならまず必要であるところの食事と睡眠。用足しはその後だ、飯食わなきや必要無いだろ？しね。

呼吸とかそつちの方は石に聞いても分からないと思つし、第一付喪神の身体構造なんか知るか。知つたところで私がどうすることもできないもの。その点、食うと寝るはどうにかできるかも知れないし。

「んー、寝るのはちやんと寝る。ほら学校にてたからせ、昼と夜の差が激しくて習慣になつちまつた」

なるほど。学校つて、夜間は口中の騒がしさが嘘のよつて静かになるからなあ。日曜日はともかくとして……ん？

「生徒に依存すんなよ。そうなると、夏休みとかは生活リズム乱れたり」

「あーうん、実は少々。校庭で朝のラジオ体操やるよつになつてからはそうでも……あ、でも一度寝の習慣ついたなー」

「そんなどころまで現代人に似なくていい」

推測通りでありがとう、本当に似なくていいと思つ。あの石像なんなら勤勉さを象徴したようなもののはずなんだから、せめてモダルの人物に似なさいよ。

そこまで考えてから小石に視線を戻すと、何やらもどもどとむず痒い動きをしている。これはあれか、人間で言つとこのもじもじしてるとて奴か。

「そんで食事つづーか…………そのー、腹減つた。何か食べるもんない？」

もじもじしながらの彼の一言に、がくりと顎を落とした。腹減つてるなら先に言えとかそんなこと言いたいのもあるけれど、相手は小石なわけで。

「腹あるの？ というか、やっぱりご飯食べるんだ」

「人間の言葉で言うとそつなるんだよ！ オレだって生きて動いてんだし、それなりの燃料は必要だつて！」

かたかたかたと、テーブルの上で身体全体を使って主張する小石。確かに、彼の言つことも一理ある。しかし、そうすると今まではどうやって生きてきたんだか。

「だからこんだけすり減つてんだよ。砕ける前はたまにお供え物とがあつたりしてさ、それで腹満たしてたんだけど。オレ今じゃただの石だし、自力じやろくに獲物取れねえ」

「……なるほど。厳しいねえ、そりや」

疑問への答えありがとう、質量をエネルギーに変えたわけか。文字通り身を削つた……人間が脂肪を燃やすのと同じ要領なんだろうか。いや、妖怪の消化器がどうなつてるかなんて私知らないし知るつもりもないけれど。

「で、何をどうやって食べるのよ。アンタどう見ても口ないし」

そして、次の疑問を私は口にした。石像そのままならこいつだって手で持つて口で食べるんだろうけど、今このこいつには手も足も口もございません。外見上ただの小石だもの。

それはそれで、見てみたい。

「食つもんは前からお供え食つてたし、多分人間と一緒にいいと思う。食い方は……オレにもどうやるんだか分かんねえ。外から見てどうなつてるか、教えてくれねえ？」

「それもそうね。ちょっと待つてて、なんか取つてくる」

小石当人……人じやないけど、他に私は言い方を知らないので……当人に言われて納得した。確かに、聞くより見たほうが早いに決まっている。石ころに頷いて、私は立ち上がった。

冷蔵庫にはろくなもんが入つてなかつたので、炊飯器の中にあつたご飯と海苔を使って小さめのおにぎりを作つた。石ころの好みなんか知らないので、適当に醤油かけた鰯節を詰め込む。普通なら梅

干しが一般的なんだろうけど、あいつ小学校にいたからな。味覚まで小学生なんてことになつてたら、いきなり酸っぱいのは困るだろ？

お皿に載せて小石の皿の前に置いてやると、皿に見えて石の動きが良くなつた。というか、全身を使って喜びを表現している。かつたこつとかつたこつとリズミカルにテーブル上を動いて、うまく皿に自分の身体を乗せてしまつた。そつが、そんなに腹が減つてたか。

「付喪神と人間の味覚が合つてゐるのかどうか、なんて知らないからね」

「はーい。いただきまーす」

私の注意もどこ吹く風とばかり、口のある存在ならばくりとかぶりつくるところを、この石はよじよじと登つてぺたんと張り付いた。ちゃんといただきますする辺り、さすが元小学校在住だなあ。

で、食事をする小石をじつと観察してみる。上からはそのまま小刻みに動いているとしか見えないんだけど、どうもおにぎりの表面をぞりぞり削つていてるよつた気がする。たまにぱらりと海苔が粉になつて落ちたりするから、そう思えるだけなんだけど。

ある程度時間が経つたところで、石ころは動きを止めた。少しだけおにぎりの表面から身体を浮かせているのは、どうやらこちらを伺つているっぽい。その下から見えるおにぎりがしつかり削れているから、さつきの推測は間違いなさそうだ。

「なー。外から見たらどんな感じ？」

「えーとね……平らになつてる部分でおろし金みたいに削り取つてるっぽいね。ちょっと裏見せて」

「はいよ」

小石が答えるのを待つて、つまみ上げて裏を見る。ふつむなるほど、こんな風になつてるんだ。

「はは、何か面白い。あなたの素材つて細かい穴がたくさん開いてるんだけど、その穴の中に食べ物が潜り込んでつてるね」

「へー、やうなつてるんだ」

石こうは何度も軽く身体を動かした。恐らく頷いたんだろうな、この動きは。自分の食事の仕方が外から分かったなんて、きっとこいつには初めてだつたから。

食事をするとなるともう一つ、問題が出てくる。人間にとつても重要な問題だ。

「……そう言えれば、トイレは？」

「あー、一応出すには出す。ただ、多分外から見たら削れた粉が出て来るようになしか見えないんじゃねーかな？」今までそうだつたしおにぎりを一個平らげた彼は、思い出しながら答えてくれる。きっと、石像の姿だつた頃のことを思い出してるんだろう。たまにあいつた石像とかの周囲に粉っぽいのが落ちてるの、ひょっとして付喪神の排泄だつたりするんだろうか？

「そこまで消化すんのかー。人間より吸収効率良くない？」

「かもなー。ま、滅多に飯食えないからかも。おかげで、さつきのおにぎりで多分一ヶ月くらいは過ごせるぜ」

「なるほど」

本気で効率いいな。それだけ消費エネルギー切り詰めないと生きられなかつたんだ、と思うと少々切なくなるけど。

あー、うん。ここまで感情移入しちゃつたら、もうビビりしそうもないや。問題点もそれなりに解消されてるし。

「……食事はするけど大した量じゃない。用も足すけど削れた粉。特に置いといても何の問題もないか」

「え？」

かこん。

石こうが、空になつた皿の上で音を立てた。きっと、私が何を言つてゐるんだか分かつてないんだろう。人間同様お腹いっぴいで満足満足、つて感じで。

だから私は、石を軽く指先でつつきながらちゃんと言つてやつた。

「うちに置いていたげる。一応生きてるわけだし、外に放り出すのも何だしね」

「へ？」

言われた石のの方は、やつぱり何を言われたのか分かつてないらしい。もし顔があつたらぼかーん、としてるんだろうと思つ。そうして、やや時間を置いて私の言葉の内容をやつと飲み込めたところで、その表情が綻ぶんだ。

「うわ、いいの？ ありがとー」

表情こそ変わりようはないけれど、こかつこと目の上で楽しそうに跳ねる石のを、私はつまみ上げた。食事終わったんだから、皿から退かないと無作法じゃないかな。

「気にしない。やじらのペツト飼うよつぱど半間からなさうだし」

「それでもさ、ありがとー」

手間がかかるないつていつのは本当に本音なんだけど、それでも小石は嬉しそうに礼を言つてくる。いやあ、やじらまで喜ばれたらひとつとしても放つてはおけないじゃないの。

さて、そうなると新たに浮上した問題がある。私はやさきから、こいつのことを石の、小石、こいつ、彼と称していいわけだけど。「名前付けないとなあ。何かついてた名前、ある？」

「んー。思い当たるつづーたら元んなつたあいつの名前だけ」

「それもそうか」

この小石は、元々実在した人物をモデルに作られた石像だった。碎かれる前、お供え物もらう時なんかはその彼の名前で呼ばれていたんだろう。でも、そのままじゃつまらないかな。

かといって、私にネーミングセンスはない。よつて、単純な名前になつてしまつがその辺は許してくれ、小石。

「じゃ、キンジで」

「つわ単純」

言つと想つたよ。しょづがないだろつ、思い当たるフシなんて他

にないんだから。とはいってはこれからどれだけの時間付き合っていくか分からぬ、自分自身の名前なんだよなあ。

「いや？」

「全然。分かりやすくていいじゃん」

意外な答えを返してきた小石は、かたかたと身体を揺りしげりとなく嬉しそうである。それを見て、私は気がついた。

元の石像についてた名前はあくまでも、モデルになつた人物の名前だ。象られたとは言え小学校の片隅で意思を持ち、今私の前でおにぎりを食べ終わつて満足している『ここにつけ血脉』の名前じゃないんだもんな。

自分の名前とこいつのをもじつて、よほど嬉しいんだが。私も、こいつに名前をつけた甲斐があるといつものだ。

「それじゃ、キンジでいいよね。これからよろしく」

多分この辺が頭に相当するんだが、とこいつ部分を撫でてやりながら、私は改めて名前を呼んでやる。キンジ自身もかこかこと身体をゆすりながら、私に答えた。

「お、よろしく……あ

「何よ」

そのキンジがピタリと動きを止めての一聲。何か不備でもあつたかな、と顔を歪める私に彼は、やつと氣がついたとばかりに少し不満気な言葉を上げてきた。

いや、確かにうづかりしてたわ。

「オレ、あなたの名前知らねえじゃん」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7399w/>

---

奴は小石

2011年9月16日03時13分発行